

『南水洋捕鯨業記録』診療状況一覧表から見る遠洋航海の疾病について  
About diseases of ocean voyage seen from "Antarctic Whaling Industry Record"  
medical treatment situation list

岸本 充弘

Mitsuhiro KISHIMOTO

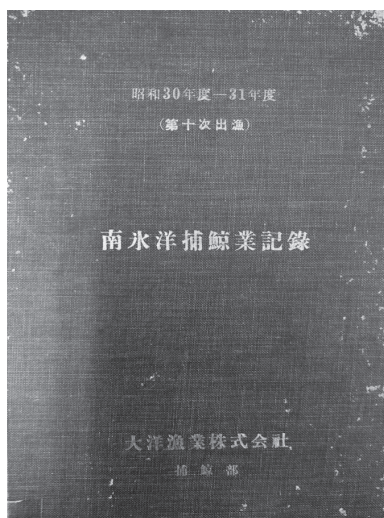
## 要 旨

旧大洋漁業が作成した戦後の『南水洋捕鯨業記録』の中に診療状況一覧表があり、当時の南水洋捕鯨に出漁した乗組員の疾病や治療状況の一面がわかるものとなっている。これらの資料から見えてくる、南水洋捕鯨や遠洋航海での疾病等についての状況や、その背景、要因等を検証することを試みた。

<キーワード>: 南水洋捕鯨、大洋漁業、捕鯨母船錦城丸、南水洋捕鯨業記録、診療

## はじめに

筆者は下関市立大学鯨資料室<sup>(注1)</sup>所蔵資料のうち、旧大洋漁業(現・マルハニチロ)が作成した『第六次南水洋捕鯨業記録』での、南水洋捕鯨従事者の出身地と、国内におけるくじらにゆかりのある地域の関連性について『社会システム研究第20号』で検証を行った<sup>(注2)</sup>。本稿では引き続き、『昭和30年度～31年度(第十次出漁)南水洋捕鯨業記録』(以下『捕鯨業記録』)(写真①)に掲載されている衛生状況に係る記録等を通じて、捕鯨等遠洋航海における疾病並びにその処置状況等について検証することを試みた。加えて、当時の捕鯨従事者として現場の状況を



写真①

を見聞きし、実体験されている捕鯨OBへの聞き取り調査を行うとともに、関連書籍や資料等を通じ捕鯨等の遠洋航海における疾病の状況と対応、要因や背景等について検証することで、昭和30年代の商業捕鯨に係る実態を、衛生状況の側面から少しでも明らかにしていくこととする。なお、捕鯨OBへのヒアリング内容の本稿への掲載については、ヒアリング

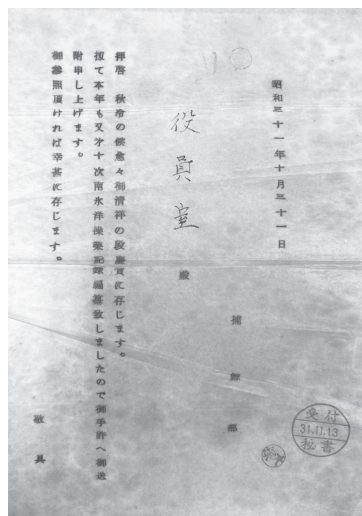
対象者から同意を得ていることを申し添える。

## 1. 『捕鯨業記録』と衛生状況について

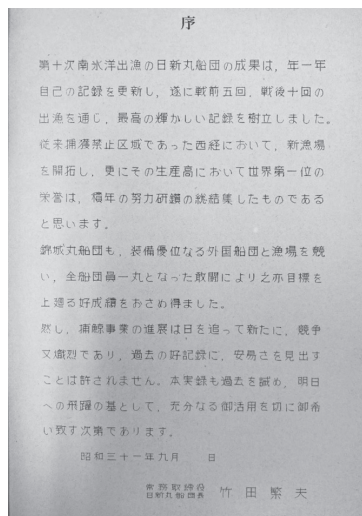
この『捕鯨業記録』には、昭和三十一年十月三十一日付で捕鯨部から役員室宛の送付文(写真②)1枚が挟み込まれており、昭和三十一年十一月十三日付秘書受付の押印がある。また、『捕鯨業記録』の序の頁に、昭和三十一年九月 日と、日付が空欄で「従来捕獲禁止区域であった西経において、新漁場を開拓し、更にその生産高において世界第一位の栄誉は、積年の努力研鑽の総結集したもの」と常務取締役日新丸船团长竹田繁夫名で記載があり(写真③)、当該年度の南水洋捕鯨生産高が世界一となったことや、当該出漁終了後、この報告書が作成され、大洋漁業の役員に提出されるまで概ね半年間の期間があったことがわかる。

この『捕鯨業記録』にある第十次南水洋捕鯨では、日本から大洋漁業の捕鯨母船日新丸船団及び錦城丸船団、日本水産の捕鯨母船函南丸船団の計三船団が出漁し、総捕獲頭数5,154頭、シロナガス換算2,742.2頭<sup>(注3)</sup>で、同時期南水洋捕鯨に出漁した国別では、ノルウェー、英国に次ぐ3番目の捕獲頭数であった。また生産高については、日本の三船団による鯨油、鯨肉等生産高合計が115,231トンで、前年漁期である1954(昭和29)年～1955(昭和30)年に行われた第九次南水洋捕鯨時と比較し、生産高が12,425トン増加している<sup>(注4)</sup>。また、

日新丸船团长竹田繁夫名で記載のあった「生産高において世界第一位」については、徳山宜也の著書の中で「日新丸船団は・・・(中略)思い切った漁場の大転換が成功し、遂にシロナガス換算1,150頭という世界最高の捕獲と生産を記録した」とあり<sup>(注5)</sup>、そのことを裏付けるものとなっている。『捕鯨業記録』の第十次南水洋捕鯨は、戦後の日本における食糧難解消を目的に、1946(昭和21)年に再開された南水洋捕鯨出漁から10年目にあたる時期で、



写真②



写真③

1955（昭和30）年代後半には、日本の南水洋捕鯨における捕獲頭数、鯨肉生産量ともにピークを迎えることになる<sup>(注6)</sup>。

『捕鯨業記録』の六には衛生状況に係る記録があり（写真④）、捕鯨母船錦城丸医務室での診療状況延人

数を一覧表として掲載している

（表1）。一覧表は、消化器、呼

吸器等の病類ごとの診療状況延

人数を、事業部、船員、捕鯨船

の各担当業務別区分別の人数

と、各区分の合計した人数を掲

載するとともに、各病類の区分

ごとに、治療人数、治療率と止

療人数の記載がある。表1と表

1を基に区分割合等で作成した

表2によれば、区分別合計病類

で一番多いのは、その他の848

人で全体の27.8%を占める。

次に多いのが消化器の510人で

16.7%、続いて皮膚科の379

人で12.4%、神経の378人で

12.4%と続き、更に感冒の242

人で7.9%となっている。

表1及び表2で病類の人数と

割合を区分ごとに見ていくと、

捕鯨母船の甲板で鯨の解体、船

内での加工や搾油、製油等に直

接従事する事業部員の病類で多

いのはその他であり、続いて皮

膚科や消化器、神経等での診療

## 六、衛生状況

写真④

表1 錦城丸 診療状況一覧表（延人数等）

（単位：人）

| 区分<br>病類 | 事業部   | 船員  | 捕鯨船 | 合計    | 治療    | 治療率<br>(%) | 止療 |
|----------|-------|-----|-----|-------|-------|------------|----|
| 消化器      | 274   | 224 | 12  | 510   | 508   | 99.6       | 2  |
| 呼吸器      | 108   | 74  | 0   | 182   | 182   | 100.0      | 0  |
| 感冒       | 173   | 62  | 7   | 242   | 242   | 100.0      | 0  |
| 脚気       | 0     | 0   | 2   | 2     | 2     | 100.0      | 0  |
| 神経       | 221   | 131 | 26  | 378   | 376   | 99.5       | 2  |
| 性病科      | 45    | 48  | 0   | 93    | 93    | 100.0      | 0  |
| 皮膚科      | 331   | 35  | 13  | 379   | 378   | 99.7       | 1  |
| 耳鼻咽喉科    | 126   | 67  | 3   | 196   | 193   | 98.5       | 3  |
| 眼科       | 92    | 37  | 2   | 131   | 131   | 100.0      | 0  |
| 歯科       | 82    | 5   | 5   | 92    | 46    | 50.0       | 46 |
| その他      | 694   | 102 | 52  | 848   | 843   | 99.4       | 5  |
| 合計       | 2,146 | 785 | 122 | 3,053 | 2,994 | 98.1       | 59 |

出典：『昭和30年度-31年度（第十次出漁）南水洋捕鯨業記録』、521頁から作成

表2 錦城丸 診療状況一覧表（区分別割合等）

| 区分<br>病類 | 事業部員<br>割合 (%) | 船員割合<br>(%) | 捕鯨船員<br>割合 (%) | 全体割合<br>(%) |
|----------|----------------|-------------|----------------|-------------|
| 消化器      | 12.8           | 28.5        | 9.8            | 16.7        |
| 呼吸器      | 5              | 9.4         | 0              | 6           |
| 感冒       | 8.1            | 7.9         | 5.7            | 7.9         |
| 脚気       | 0              | 0           | 1.6            | 0.1         |
| 神経       | 10.3           | 16.7        | 21.3           | 12.4        |
| 性病科      | 2.1            | 6.1         | 0              | 3           |
| 皮膚科      | 15.4           | 4.5         | 10.7           | 12.4        |
| 耳鼻咽喉科    | 5.9            | 8.5         | 2.5            | 6.4         |
| 眼科       | 4.3            | 4.7         | 1.6            | 4.3         |
| 歯科       | 3.8            | 0.6         | 4.1            | 3           |
| その他      | 32.3           | 13          | 42.6           | 27.8        |
| 合計       | 100            | 100         | 100            | 100         |

出典：『昭和30年度-31年度（第十次出漁）南水洋捕鯨業記録』、521頁から作成

が多い。一方、船の運航等を担当する船員は、消化器や神経の診療がその他より多い傾向にあり、鯨を直接捕獲したり、鯨を探す探鯨や、捕獲した鯨を集め母船の近くまで曳航していく曳鯨等を担当する捕鯨船では、その他や神経の診療が多いことがわかる。また、治療率については、各病類とも治療率が98%以上となっているが、歯科だけは治療率が50%と他の治療率と比較して低くなっている。なお、『捕鯨業記録』に掲載されている衛生状況は、当該年次以降の記録では掲載されておらず、その経緯や理由等については不明である。

## 2. 南氷洋捕鯨と遠洋航海における疾病の傾向を検証する

南氷洋捕鯨等の遠洋航海時での疾病等については、戦前の事例として、1936（昭和11）年旧林兼商店が大洋捕鯨を設立し、初の南氷洋捕鯨出漁時に国産初の捕鯨母船「日新丸」事業部長として乗船していた志野徳助がオーストラリアのフリーマントルに寄港した際、過労やストレスが原因による脳溢血で急逝したものがある<sup>(注7)</sup>。また、同じく戦前の1937（昭和12）年南氷洋捕鯨に出漁した「第二日新丸」に農林省監督官として乗船した大村秀雄の記録には、「11/2脚気ではないかしらと思って脛を押して見る。兎に角エビオスを飲むことにする」、「12/25昨夜事業夫の1人アルコールを飲んで意識不明に陥っている者がある由」、「1/4事業夫ワイヤーに撥ねられて負傷」、「1/15船内に脚気患者増加」、「1/22ドクターの話によれば事業夫中にインフルエンザが流行しかけていと云う」、「1/29事業員病死。急性肺炎とのこと」、「2/13病室は満員。性病を貰って来た男が来ている」等、船内で発生する様々な疾病や怪我等に係る記載がある<sup>(注8)</sup>。拙著でも、1940（昭和15）年南氷洋捕鯨に第二日新丸事業部長として乗船した中部利三郎が記した漁場日誌に「12/27解剖刀にて負傷し入院す」、「潜水夫入水したる時急に異常を起こし入院す」との記録がある<sup>(注9)</sup>。更に片岡千賀之他の著書でも「1930年、富山工船漁業のカニ工船・エトロフ丸で、漁夫・雑夫16人が死亡する事件が起こった。これは飲料水の質が悪く、野菜が不足して脚気が流行し、医療も十分ではなく、また病人まで働かせたためであった。」との記述もある<sup>(注10)</sup>。

また、戦後の事例として商業捕鯨モラトリアム直前の1986（昭和61）年に、捕鯨母船第三日新丸に船医として乗船した田村京子の著書で「平均年齢46歳、五十肩、急性下痢症、慢性胃炎、足首捻挫、白癬生、高血圧、咽頭炎を診療」、「第三日新丸診療所を訪れた患者さんの中でも最多を占めたのは、高血圧症の患者さんであった」、「内科系疾患1912名、高血圧症375名、かぜ症候群362名、胃炎331名、肝機能障害324名、下痢、消化不良204名、胃・十二指腸潰瘍128名、じんましんアレルギー疾患76名、その他112名、ペインクリニック

893名、外科系疾患846名、眼科・耳鼻科系疾患404名、皮膚科系疾患313名、歯科・口腔外科系疾患158名、泌尿器科系疾患12名（全航海中）」と、半年間にも及ぶ長い航路の中で発生した南氷洋捕鯨従事者の疾病や怪我等に対する事例や、各病類ごとの人数等について具体的に記述している<sup>(注11)</sup>。

一方、南氷洋捕鯨での疾病や怪我等の実態について、昭和30年代以降の商業捕鯨における現場での状況を確認するため、旧大洋漁業で捕鯨船の機関員として従事され、その後共同船舶で機関長として調査捕鯨等に従事された中村和夫氏<sup>(注12)</sup>に聞き取り（2022（令和4）年5月12日実施）したところによれば「入社4年目の昭和41年、南氷洋捕鯨に出漁していた捕鯨船第十一利丸乗船時に銹箱で転倒し、背中を怪我した際に母船の医務室で治療を受けたことがある。母船が捕鯨船へ給油する間、移乗して治療をしてもらったが、後で新たな疾患が出ないとも限らないので、診断書等の書面をもらった記憶がある。これ以外に大きな怪我をしたり、他の乗組員が大病や大怪我をしたことは無かったが、航海中や操業中に手を痛めたりするなどの小さな怪我はよくあった。」とのことである。また、日本水産で捕鯨に従事されていた、日本捕鯨協会会長の山村和夫氏<sup>(注13)</sup>に当該衛生資料を事前を送付し聞き取りをしたところ（2022（令和4）年5月27日実施）、「歯科の治療率が低いのは歯科医が乗船しておらず、虫歯をペンチで抜歯することはあったが、痛み止めの処方程度の治療しかできなかったためではないか。また推察だが、その他の内訳は、船で鯨の解体時に解剖刀を使うので、切り傷、擦り傷や、打撲、腰痛が多かったことがそれに当たるのではないか。また、長い航海で酒量が多くなったことで消化器の治療が多かった。昭和30年代は捕鯨の規模を拡大する時代で、人を選べる時代ではなく、中には素性がはっきりしない者もあり、船内で喧嘩や刃傷沙汰もあったと聞いた。」とのことであった。母船の医務室で治療する内容も当時の船員の質が影響しており、「逆に1970年代は捕鯨縮小の時代で、生活態度がまじめな人間が残ることになり、素行が悪い人は少なかった。一方、船員の高齢化が原因で腰痛を発症する人が多く、予防的な検査を乗船前に受けていた方もいた。また、途中で仲積船が来ると風邪をひく人が出ることもあり、家族からの便りでうつるとの話もあったが、実際は仲積船の乗組員と接触するため風邪が持ち込まれたようだ。現在はコロナ禍で乗船前2週間は隔離するなどしているが、昔はそのようなこともなく、途中で怪我や内臓疾患等により仲積船で内地に戻る船員もいた。腰痛と怪我が多いため、会社としては外科の先生を探していたようだ。女性の有名な船医の方がいたが、針灸をしてくれるので人気があったようだ。」との話があり、商業捕鯨規模の拡大縮小や、時代の変遷により発生

する疾病等も変化してきた実態をうかがうことができた。

ヒアリング結果や書籍等に記載されている長期航海で発生する疾病や怪我等の内容は、幅広く様々な疾患が発生しているものの、主には飲酒が原因と思われる内科系疾患や、ストレス等による神経系疾患、作業に伴う怪我等の外科系疾患が多く、『捕鯨業記録』に記載されている衛生状況と同じ傾向にあることがわかる。半年間という長期間にわたり、プライバシーが十分確保されない空間での共同生活と、捕獲成績等のプレッシャーの中、長期の航海に伴うストレスによる神経系疾患や、ストレス解消の飲酒が原因となる内科系疾患が多いことに加え、南氷洋という厳しい環境の中で大型海洋生物である鯨を捕獲、解体するという、他の水産業では見られない危険な作業や重労働により発生する外科系疾患が多いという傾向にあることがわかる。また、商業捕鯨の全盛期から商業捕鯨モラトリアムに移行する中、捕鯨自体の縮小等による従事者の高齢化に伴い高血圧症や腰痛等、高齢者に多く見られる疾患等が増加する傾向にあったことも、各種資料やヒアリング等から推察できる。類似の事例として捕鯨従事者ではないが、長期の航海を行う沖合底曳漁船船員の疾病について調査した江原美穂他による研究によれば<sup>(注14)</sup>、全体として消化器系の疾病が30.3%、筋骨格系の疾病が26.9%であったとの結果が記載されており、発生する疾病の傾向としては捕鯨従事者と類似していることがわかる。

### 3. おわりに

2019（令和元）年7月1日に31年ぶりとなる商業捕鯨が再開され、ようやく4年目に入った。我が国のEEZ（排他的経済水域）内で行われる母船式商業捕鯨では、かつての南氷洋捕鯨のように厳しい環境の中、半年以上にわたる長期の遠洋航海が行われることは無くなったが、沖合に出た場合の船内での病気や怪我に対する不安は常に付きまとう。捕鯨の操業中や各種作業時はもちろん、船内で発生する疾病や怪我等に対応するため現在も船医が捕鯨母船に乗船し、24時間その対応にあたっておられることで、乗組員の方の健康と安全が守られていることに改めて敬意を表したい。また、病気や怪我から乗組員を守る船内環境の改善等が、2024年の引渡しに向けて建造の準備が進む新しい捕鯨母船で、より一層進むことを期待している。快適な船内環境や作業環境を構築し、航海中に発生する疾患等を極力減少させるために、過去の商業捕鯨時における疾患等における状況等を検証することは、大変意義のあることではないかと考える。更にそのためには、捕鯨やそれに類似する水産業等従事者による航海中の疾患等の詳細なデータを集め、分析し検証する必要があるが、

それらは今後の課題としたい。

前号に引き続き、このたびの調査においてもヒアリング等でご協力をいただき、実名での掲載をご了解いただいた捕鯨OBの山村和夫日本捕鯨協会会長、中村和夫氏にこの場をお借りし、改めてお礼申し上げたい。

---

(注)

- (1) 岸本充弘 「『南水洋捕鯨業記録』に見る従事者の地域性について」北九州市立大学大学院社会システム研究科、『社会システム研究』第20号、2022年、56頁、脚注(1)参照。
- (2) 注(1)前掲論文、51～57頁。
- (3) シロナガス換算については、岸本充弘「日本水産(株)捕鯨労組資料に見る捕鯨従事者待遇—昭和30年代の資料を中心に—」北九州市立大学大学院社会システム研究科、『社会システム研究』第7号、2009年、128頁、脚注(10)参照。
- (4) 多藤省徳『捕鯨の歴史と資料』水産社、1985年、172～175頁。
- (5) 徳山宜也『大洋漁業捕鯨事業の歴史』徳山私家版、1992年、321頁。
- (6) 『令和2年度食料需給表』農林水産省、品目別累年表3-7、2022年。
- (7) 注(4)前掲書、83～85頁。
- (8) 大村秀雄『南水洋捕鯨航海記1937/38年播鯨期捕鯨の記録』鳥海書房、2000年、11～78頁。
- (9) 岸本充弘『戦前期南水洋捕鯨の航跡 マルハ創業者・中部家資料から』花乱社、2020年、98～103頁。
- (10) 片岡千賀之、小岩信竹、伊藤康宏『日本漁業の200年』北斗書房、2022年、141頁。
- (11) 田村京子『捕鯨船団女ドクター南水洋に行く』集英社、1987年、47～200頁。
- (12) 中村和夫氏については、注(1)前掲論文、脚注(5)57頁。
- (13) 山村和夫氏については、注(1)前掲論文、脚注(6)57頁。
- (14) 江原美穂、松村園江、佐野裕司、武田誠一、久宗周二「沖合底曳網漁船船員の疾病と生活習慣について」日本水産工学会、2005年度日本水産工学会学術講演会講演論文集、2005年、169頁。